

基本計画書

基本計画										
事項	記入欄								備考	
計画の区分	研究科の設置									
フリガナ設置者	コクリツカクイカクホジントヤマダク 国立大学法人富山大学									
フリガナ大学の名称	トヤマダクイカクイカク 富山大学大学院 (Graduate School, UNIVERSITY OF TOYAMA)									
大学本部の位置	富山県富山市五福3190									
大学の目的	富山大学は、地域と世界に向かって開かれた大学として、生命科学、自然科学と人文社会科学を総合した特色ある国際水準の教育及び研究を行い、人間尊重の精神を基本に高い使命感と創造力のある人材を育成し、地域と国際社会に貢献するとともに、科学、芸術文化、人間社会と自然環境との調和的発展に寄与することを目的とする。									
新設学部等の目的	芸術化学研究科は、総合芸術を基盤とした人間の文化活動全般を教育研究の対象とし、独自の表現法とその成果の社会的活用という観点から、多角的研究手法による実践的研究を通じて、これからの社会において、学芸の深化を実現させる教育研究をとおし、芸術の成果を活用して心豊かな地域文化を創生するために、先導的役割を担う人材を養成することによって社会の創造性を強化することを設置目的とする。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	【基礎となる学部】 芸術化学部 14条特例の実施	
	大学院芸術化学研究科 (Graduate School of Art and Design) (修士課程) 芸術化学専攻 (Major in Art and Design) 計	2年	8人	—人	16人	修士 (芸術化学)	平成23年4月第1年次	富山県高岡市二上町180		
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	人文科学研究科 文化構造研究専攻 (△5)、地域文化研究専攻 (△5) ※平成23年4月学生募集停止 平成23年4月 人文科学専攻設置予定 (8) [平成22年6月設置報告書提出] 教育学研究科 (廃止) 学校教育専攻 (△6)、教科教育専攻 (△32) ※平成23年4月学生募集停止 平成23年4月 人間発達科学研究科設置予定 発達教育専攻 (13)、発達環境専攻 (13) [平成22年8月設置報告書提出] 経済学研究科 (定員増) (8 → 18) [平成23年度概算要求中] 地域・経済政策専攻 (4 → 6) 企業経営専攻 (4 → 12)									
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
	(修士課程) 芸術化学研究科 芸術化学専攻	講義	演習	実験・実習	計	30単位				
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等		
			教授	准教授	講師	助教	計	助手		
	芸術化学研究科 (修士課程)		人	人	人	人	人	人		
	芸術化学専攻		14 (14)	10 (10)	4 (4)	0 (0)	28 (28)	0 (0)	0 (0)	
	計		14 (14)	10 (10)	4 (4)	0 (0)	28 (28)	0 (0)	0 (0)	
	新設	人文科学研究科								平成22年6月 設置報告書提出
		人文科学専攻 (修士課程)		33 (33)	26 (26)	1 (1)	0 (0)	60 (60)	0 (0)	
		計		33 (33)	26 (26)	1 (1)	0 (0)	60 (60)	0 (0)	
	分	人間発達科学研究科								平成22年8月 設置報告書提出
		学校教育専攻 (修士課程)		11 (11)	14 (14)	4 (4)	0 (0)	29 (29)	0 (0)	
発達環境専攻 (修士課程)		25 (25)	12 (12)	5 (5)	0 (0)	42 (42)	0 (0)			

	計	36 (36)	26 (26)	9 (9)	0 (0)	71 (71)	0 (0)	0 (0)
教 員 組 織 の 設 分 要	経済学研究科							
	地域・経済政策専攻(修士課程)	17 (17)	13 (13)	0 (0)	0 (0)	30 (30)	0 (0)	0 (0)
	企業経営専攻(修士課程)	21 (21)	12 (12)	0 (0)	0 (0)	33 (33)	0 (0)	0 (0)
	計	38 (38)	25 (25)	0 (0)	0 (0)	63 (63)	0 (0)	0 (0)
	生命融合科学教育部							
	認知・情動脳科学専攻(博士課程)	8 (8)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	0 (0)
	生体情報システム科学専攻(博士課程)	10 (10)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	0 (0)
	先端ナノ・バイオ科学専攻(博士課程)	8 (8)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	0 (0)
	計	26 (26)	14 (14)	1 (1)	0 (0)	41 (41)	0 (0)	0 (0)
	医学薬学教育部							
	医科学専攻(修士課程)	36 (36)	27 (27)	2 (2)	0 (0)	65 (65)	0 (0)	5 (5)
	看護学専攻(修士課程)	12 (12)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	19 (19)	0 (0)	5 (5)
	薬科学専攻(博士前期課程)	24 (24)	24 (24)	0 (0)	0 (0)	48 (48)	0 (0)	8 (8)
	計	72 (72)	56 (56)	4 (4)	0 (0)	132 (132)	0 (0)	18 (18)
	医学薬学教育部							
	生命・臨床医学専攻(博士課程)	23 (23)	19 (19)	2 (2)	0 (0)	44 (44)	0 (0)	9 (9)
	東西統合医学専攻(博士課程)	6 (6)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	9 (9)
	生命薬科学専攻(博士課程)	19 (19)	22 (22)	0 (0)	0 (0)	41 (41)	0 (0)	1 (1)
	計	48 (48)	45 (45)	2 (2)	0 (0)	95 (95)	0 (0)	19 (19)
	理工学教育部							
数学専攻(修士課程)	8 (8)	3 (3)	1 (1)	2 (2)	14 (14)	0 (0)	0 (0)	
物理学専攻(修士課程)	7 (7)	5 (5)	0 (0)	1 (1)	13 (13)	0 (0)	0 (0)	
化学専攻(修士課程)	7 (7)	6 (6)	3 (3)	3 (3)	19 (19)	0 (0)	0 (0)	
生物学専攻(修士課程)	6 (6)	5 (5)	1 (1)	1 (1)	13 (13)	0 (0)	0 (0)	
地球科学専攻(修士課程)	6 (6)	6 (6)	0 (0)	1 (1)	13 (13)	0 (0)	0 (0)	
生物圏環境科学専攻(修士課程)	5 (5)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	0 (0)	
電気電子システム工学専攻(修士課程)	11 (11)	7 (7)	1 (1)	4 (4)	23 (23)	1 (1)	0 (0)	
知能情報工学専攻(修士課程)	9 (9)	4 (4)	5 (5)	1 (1)	19 (19)	2 (2)	0 (0)	
機械知能システム工学専攻(修士課程)	12 (12)	7 (7)	4 (4)	3 (3)	26 (26)	1 (1)	0 (0)	
物質生命システム工学専攻(修士課程)	20 (20)	15 (15)	2 (2)	6 (6)	43 (43)	3 (3)	0 (0)	
計	91 (91)	63 (63)	17 (17)	22 (22)	193 (193)	7 (7)	0 (0)	
理工学教育部								
数理・ヒューマンシステム科学専攻(博士課程)	30 (30)	13 (13)	9 (9)	6 (6)	58 (58)	0 (0)	0 (0)	
ナノ新機能物質科学専攻(博士課程)	21 (21)	16 (16)	3 (3)	7 (7)	47 (47)	0 (0)	0 (0)	

教 員 組 織 の 概 要	新エネルギー科学専攻(博士課程)	14	13	3	7	37	0	0	
		(14)	(13)	(3)	(7)	(37)	(0)	(0)	
	地球生命環境科学専攻(博士課程)	16	14	1	2	33	0	0	
		(16)	(14)	(1)	(2)	(33)	(0)	(0)	
	計	81	56	16	22	175	0	0	
		(81)	(56)	(16)	(22)	(175)	(0)	(0)	
	既 設 の 分 概 要	附属病院	2	7	29	53	91	3	0
			(2)	(7)	(29)	(53)	(91)	(3)	(0)
		和漢医薬学総合研究所	6	5	0	7	18	1	0
			(6)	(5)	(0)	(7)	(18)	(1)	(0)
生命科学先端研究センター		0	4	0	2	6	0	0	
		(0)	(4)	(0)	(2)	(6)	(0)	(0)	
水素同位体科学研究センター		3	2	1	1	7	0	0	
	(3)	(2)	(1)	(1)	(7)	(0)	(0)		
地域連携推進機構	3	1	1	0	5	0	0		
	(3)	(1)	(1)	(0)	(5)	(0)	(0)		
その他のセンター等施設	13	11	3	1	28	1	0		
	(13)	(11)	(3)	(1)	(28)	(1)	(0)		
計	27	30	34	64	155	5	0		
	(24)	(29)	(33)	(64)	(150)	(5)	(0)		
合計	325	249	75	198	847	22	37		
	(325)	(249)	(75)	(198)	(847)	(22)	(37)		
教 員 以 外 の 職 員 の 概 要	職 種	専 任	兼 任	計					
	事 務 職 員	342 人	36 人	378 人					
		(342)	(36)	(378)					
	技 術 職 員	694	36	730					
		(694)	(36)	(730)					
	計	1073	74	1147					
	(1073)	(74)	(1147)						
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計				
	校舎敷地	415,605 m ²	— m ²	— m ²	415,605 m ²				
	運動場用地	105,572 m ²	— m ²	— m ²	105,572 m ²				
	小 計	521,177 m ²	— m ²	— m ²	521,177 m ²				
	そ の 他	179,837 m ²	— m ²	— m ²	179,837 m ²				
	合 計	701,014 m ²	— m ²	— m ²	701,014 m ²				
校 舎	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計					
	204,238 m ² (204,238 m ²)	— m ² (— m ²)	— m ² (— m ²)	204,238 m ² (204,238 m ²)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体			
	126 室	189 室	717 室	21 室 (補助職員 10人)	4 室 (補助職員 1人)				
専 任 教 員 研 究 室	新設学部等の名称			室 数					
	芸術文化学研究科			28 室					
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書	学術雑誌	電子ジャーナル	視聴覚資料	機械・器具	標本		
		[うち外国書] 冊	[うち外国書] 種	[うち外国書] 種	点	点	点		
	芸術文化学研究科	68,828 [13,020] (68,828 [13,020])	1,096 [263] (1,096 [263])	0 [] (0 [])	2,663 (2,663)	25 (25)	0 (0)	大学全体での共用分 図書(冊) 1,262,309 [423,002] 学術雑誌(種) 24,905 [8,264] 電子ジャーナル 8,239 [7,424]	
計	68,828 [13,020] (68,828 [13,020])	1,096 [263] (1,096 [263])	0 [] (0 [])	2,663 (2,663)	25 (25)	0 (0)			
図 書 館	面積	閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数					
	12,797 m ²	1,248		982,639					
体 育 館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要							
	7,112 m ²	弓道場・武道館 プール・テニスコート							

経費の見積り及び維持方法の概要	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	国費による	
	教員1人当り研究費等									
	共同研究費等									
	図書購入費									
	設備購入費									
学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次				
	817千円	535千円	—千円	—千円	—千円	—千円				
学生納付金以外の維持方法の概要	運営費交付金, 附属病院収益, 雑収入等									
既設大学等の状況	大学の名称	富山大学								
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	平成22年度編入学定員10→7に変更 編入学者数は、学部計に含める 編入学者数は、学部計に含める 平成22年度編入学定員10→4に変更 編入学者数は、学部計に含める 平成22年度定員100→105に変更 ※収容定員のうち10人は、H21年度～H29年度までの措置5人及びH22年度からH31年度までの措置5人を含む。 医学科編入は平成18年度まで3年次、平成19年度から2年次
	人文学部						1.04			
	人文学科	4	185	3年次7	740	学士(文学)	1.04	平成18	富山県富山市五福3190番地	
	計		185	7	757					
	人間発達科学部						1.03			
	発達教育学科	4	80	—	320	学士(教育学)	1.02	平成17	富山県富山市五福3190番地	
	人間環境システム学科	4	90	—	360	学士(教育学)	1.03	〃	〃	
	計		170		680					
	経済学部						1.06			
	[夜間主コース内数]						1.06	昭和28	富山県富山市五福3190番地	
	経済学科	4	155		620	学士(経済学)	1.06			
			[20]		[80]					
	経営学科	4	135	3年次10(各学科共通)	540	学士(経営学)	1.06	昭和49	〃	
			[20]		[80]					
経営法学科	4	115		460	学士(法学)	1.05	昭和54	〃		
		[20]		[80]						
計		405	10	1,640						
		[60]		[240]						
理学部						1.05				
数学科	4	50		200	学士(理学)	1.07	平成5	富山県富山市五福3190番地		
物理学科	4	40		160	学士(理学)	1.04	〃	〃		
化学科	4	35	3年次4(各学科共通)	140	学士(理学)	1.08	〃	〃		
生物学科	4	35		140	学士(理学)	1.02	〃	〃		
地球科学科	4	40		160	学士(理学)	1.00	〃	〃		
生物圏環境科学科	4	30		120	学士(理学)	1.11	〃	〃		
計		230	4	934						
医学部						1.00	昭和50	富山県富山市杉谷2630番地		
医学科	6	105	2年次5	585	学士(医学)	1.00				

看護学科	4	80	3年次 10	280	学士(看護学)	1.01	平成5	〃	平成22年度定員60 →80に変更
計		185	15	865					
薬学部									
薬学科	6	55	—	275	学士(薬学)	1.03	平成18	富山県富山市杉谷2630番地	
創薬科学科	4	50	—	200	学士(薬科学)	1.04	〃	〃	
計		105		475					
工学部									
電気電子システム工学科	4	88	3年次 20 (各学 科共 通)	352	学士(工学)	1.04	平成9	富山県富山市五福3190番地	
知能情報工学科	4	72		294	学士(工学)	1.06	〃	〃	平成20年定員78→ 72に変更
機械知能システム工学科	4	90		358	学士(工学)	1.13	〃	〃	平成20年定員88→ 90に変更
生命工学科	4	52		156	学士(工学)	1.02	平成20	〃	平成20年度に物質 生命システム工学 科を、生命工学 科、環境応用化学 科、材料機能工学 科に改組
環境応用化学科	4	52		156	学士(工学)	1.05	〃	〃	
材料機能工学科	4	51		153	学士(工学)	1.01	〃	〃	
物質生命システム工学科	4	—		—	—	学士(工学)	〃	〃	平成20年度より学 生募集停止
計		405		20	1,519	学士(工学)			平成22年度編入学 定員30→20に変更 編入学者数は、学 部計に含める
芸術文化学部									
芸術文化学科	4	115	—	460	学士 (芸術文化学)	1.04	平成17	富山県高岡市二上町180番地	
計		115	—	460					
人文科学研究科 修士課程									
文化構造研究専攻	2	5	—	10	修士(文学)	1.10	平成9	富山県富山市五福3190番地	
地域文化研究専攻	2	5	—	10	修士(文学)	1.00	〃	〃	
計		10	—	20					
教育学研究科 修士課程									
学校教育専攻	2	6	—	12	修士(教育学)	0.83	平成6	富山県富山市五福3190番地	
教科教育専攻	2	32	—	64	修士(教育学)	0.63	〃	〃	
計		38	—	76					
経済学研究科 修士課程									
地域・経済政策専攻	2	4	—	8	修士(経済学)	2.12	平成3	富山県富山市五福3190番地	
企業経営専攻	2	4	—	8	修士(経営学)	2.62	〃	〃	
計		8	—	16					
生命融合科学教育部 博士課程									
認知・情動脳科学専攻	4	9	—	36	博士(医学)	0.63	平成18	富山県富山市五福3190番地 富山県富山市杉谷2630番地	
生体情報システム科学専攻	3	4	—	12	博士(薬学, 理学 又は工学)	2.08	〃	〃	
先端ナノ・バイオ科学専攻	3	4	—	12	博士(薬学, 理学 又は工学)	0.33	〃	〃	
計		17	—	60					

医学薬学教育部 修士課程							1.21			
医科学専攻	2	15	—	30	修士（医科学）	0.59	平成18	富山県富山市杉谷2630番地		
看護学専攻	2	16	—	32	修士（看護学）	0.87	〃	〃		
薬科学専攻	2	—	—	—	修士（薬学）	—	〃	〃	平成22年度より学生募集停止	
臨床薬学専攻	2	—	—	—	修士（臨床薬学）	—	〃	〃	平成22年度より学生募集停止	
博士前期課程										
薬科学専攻	2	35	—	35	修士（薬学）	1.34	平成22	〃	平成22年度に修士課程薬科学専攻、臨床薬学専攻を博士前期課程薬科学専攻に改組	
計		66	—	97						
博士課程										
生命・臨床医学専攻	4	18	—	72	博士（医学）	0.88	平成18	富山県富山市杉谷2630		
東西統合医学専攻	4	7	—	28	博士（医学）	0.31	〃	〃		
生命薬科学専攻	3	18	—	54	博士（薬学）	0.61	〃	〃		
計		43	—	154						
理工学教育部 修士課程							1.39			
数学専攻	2	12	—	24	修士（理学）	0.83	平成18	富山県富山市五福3190番地		
物理学専攻	2	12	—	24	修士（理学）	0.99	〃	〃		
化学専攻	2	10	—	20	修士（理学）	1.65	〃	〃		
生物学専攻	2	10	—	20	修士（理学）	1.70	〃	〃		
地球科学専攻	2	10	—	20	修士（理学）	1.35	〃	〃		
生物圏環境科学専攻	2	10	—	20	修士（理学）	1.20	〃	〃		
電気電子システム工学専攻	2	33	—	66	修士（工学）	1.40	〃	〃		
知能情報工学専攻	2	27	—	54	修士（工学）	1.86	〃	〃		
機械知能システム工学専攻	2	33	—	66	修士（工学）	1.33	〃	〃		
物質生命システム工学専攻	2	60	—	120	修士（工学）	1.36	〃	〃		
計		217	—	434						
博士課程							0.85			
数理・ヒューマンシステム科学専攻	3	5	—	15	博士（理学又は工学）	0.93	平成18	富山県富山市五福3190番地		
ナノ新機能物質科学専攻	3	6	—	18	博士（理学又は工学）	0.66	〃	〃		
新エネルギー科学専攻	3	5	—	15	博士（理学又は工学）	0.60	〃	〃		
地球生命環境科学専攻	3	5	—	15	博士（理学又は工学）	1.26	〃	〃		
計		21	—	63						
附属施設の概要	<p>名称：和漢医薬学総合研究所 目的：和漢薬に関する学理及びその応用の研究を行うことを目的とする。 所在地：富山市杉谷2630 設置年：昭和49年6月（富山大学附置和漢薬研究所） 昭和53年6月（富山医科薬科大学附置和漢薬研究所） 規模等：建物 3,486㎡</p> <p>名称：大学附属病院 目的：診療を通じて医学、薬学の教育及び研究を行うことを目的とする。 所在地：富山市杉谷2630 設置年：昭和54年10月 規模等：建物 45,302㎡</p>									

名称：附属図書館

目的：大学の理念・目標に基づき、教育及び研究に必要な図書、雑誌、データベースその他の資料を収集し、管理し、職員及び学生の利用に供することを目的とする。

所在地：（中央図書館）富山市五福3190
（医薬学図書館）富山市杉谷2630
（芸術文化図書館）高岡市二上町180

設置年：（中央図書館）昭和24年5月
（医薬学図書館）昭和50年10月
（芸術文化図書館）昭和62年3月

規模等：（中央図書館）9,877㎡
（医薬学図書館）2,940㎡
（芸術文化図書館）1,078㎡

名称：地域連携推進機構（産業連携部門、生涯学習部門、地域づくり・文化支援部門、地域医療・保健支援部門）

目的：機構は、地域社会の自律的發展に貢献するため、地域の特性を生かした産業育成、社会人教育による市民生活の充実、地域課題解決への先導的役割等を果たすとともに、地域社会に対する窓口としての機能を果たすことを目的とする。

所在地：富山市五福3190、高岡市二上町180、富山市杉谷2630
設置年：平成20年7月
規模等：建物 4,686㎡（五福地区）

名称：総合情報基盤センター

目的：大学における情報通信、情報処理及び情報共有のためのシステムを円滑かつ効率的に運用管理し、教育研究及びその他の諸活動を支援するとともに、地域社会の發展に資することを目的とする。

所在地：富山市五福3190
設置年：平成8年5月（総合情報処理センター）
平成15年4月（総合情報基盤センター）
規模等：建物 2,380㎡

名称：留学生センター

目的：外国人留学生及び海外留学を希望する富山大学の学生に対し、必要な教育及び指導助言等を行うことにより、本学における国際交流の推進に寄与することを目的とする。

所在地：富山市五福3190
設置年：平成11年4月
規模等：建物 380㎡

名称：水素同位体科学研究センター

目的：水素同位体の機能に係わる基礎的研究及び応用技術の開発を行うとともに、これら関連分野の研究開発を行う学内外の教員その他これに準ずる者の共同利用に供し、核融合炉工学、材料工学及び水素エネルギー科学にまたがる水素同位体科学研究の推進に資することを目的とする。

所在地：富山市五福3190
設置年：昭和55年4月（トリチウム科学センター）
平成2年4月（水素同位体機能研究センター）
平成11年4月（水素同位体科学研究センター）
規模等：建物 2,692㎡

名称：自然科学研究支援センター

目的：自然科学研究に関する施設設備の適切な管理・整備、共同利用の促進及び利用技術の開発等の研究支援を行い、本学の教育研究の高度化に資するものとする。

所在地：富山市五福3190
設置年：平成22年4月
規模等：建物 629㎡

名称：極東地域研究センター

目的：極東地域における学術的、総合的地域研究を行うとともに同地域における学術交流の推進を図り、もって本学の教育研究の進展並びに同地域の調和ある持続的発展と安定化に資することを目的とする。

所在地：富山市五福3190
設置年：平成13年4月
規模等：建物 149㎡

	<p>名称：生命科学先端研究センター 目的：動物実験，分子・構造解析，遺伝子実験及びアイソトープ実験に係る施設を適切に管理し，動物資源開発，分子・構造解析，ゲノム機能解析及び放射線生物解析に関する技術の利用を推進するとともに，地域や産業との連携を通じて，先端的な生命科学の研究及び教育の発展に資することを目的とする。</p> <p>所在地：富山市杉谷2630 設置年：平成17年4月 規模等：建物 7,542㎡</p> <p>名称：水質保全センター 目的：大学の教育研究等の活動に伴う環境の汚染を防止することを目的とする。</p> <p>所在地：富山市五福3190 設置年：平成16年4月 規模等：建物 460㎡</p> <p>名称：保健管理センター 目的：大学における保健管理及び健康支援，これに関する研究及び教育を一体的に行い，学生及び教職員の心身の健康の保持増進を目的とする。</p> <p>所在地：（五福支所）富山市五福3190 （杉谷支所）富山市杉谷2630 （高岡支所）高岡市二上町180 設置年：昭和50年4月（富山大学） 昭和58年4月（富山医科薬科大学） 平成13年4月（高岡短期大学） 規模等：（五福支所）建物 552㎡ （杉谷支所）建物 278.66㎡ （高岡支所）建物 110㎡</p> <p>名称：人間発達科学部附属幼稚園 目的：幼児の保育を施すとともに人間発達科学部における幼児の保育に関する研究に協力し，学部の計画に基づき学生の教育実習の実施に当たるものとする。</p> <p>所在地：富山市五艘1,300 設置年：昭和24年5月 規模等：建物 978㎡</p> <p>名称：人間発達科学部附属小学校 目的：義務教育として行われる普通教育を施すとともに，人間発達科学部における児童の教育に関する研究に協力し，学部の計画に基づき学生の教育実習の実施に当たるものとする。</p> <p>所在地：富山市五艘1,300 設置年：昭和24年5月 規模等：建物 4,870㎡</p> <p>名称：人間発達科学部附属中学校 目的：義務教育として行われる普通教育を施すとともに，人間発達科学部における生徒の教育に関する研究に協力し，学部の計画に基づき学生の教育実習の実施に当たるものとする。</p> <p>所在地：富山市五艘1,300 設置年：昭和24年5月 規模等：建物 7,845㎡</p> <p>名称：人間発達科学部附属特別支援学校 目的：知的障害に係る特別支援教育を施すとともに，人間発達科学部に附属する教育研究の機関として，学部における幼児，児童及び生徒の保育又は教育に関する研究に協力し，学部の計画に基づき学生の教育実習の実施に当たるものとする。</p> <p>所在地：富山市五艘1,300 設置年：昭和51年4月 規模等：建物 3,655㎡</p>
--	---

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合，「計画の区分」，「新設学部等の目的」，「新設学部等の概要」，「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず，斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については，共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学又は高等専門学校の出定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は，「教育課程」，「教室等」，「専任教員研究室」，「図書・設備」，「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず，斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は，「教育課程」，「校地等」，「校舎」，「教室等」，「専任教員研究室」，「図書・設備」，「図書館」，「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず，斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には，実技も含むこと。
- 6 空欄には，「-」又は「該当なし」と記入すること。

国立大学法人富山大学 設置認可等に関わる組織の移行表

平成22年度	入学定員		平成23年度	入学定員	変更の事由
富山大学					
人文学部 人文学科	185		人文学部 人文学科	185	
人間発達科学部			人間発達科学部		
発達教育学科	80		発達教育学科	80	
人間環境システム学科	90		人間環境システム学科	90	
経済学部					
経済学科			経済学科		
昼間主コース	135		昼間主コース	135	
夜間主コース	20		夜間主コース	20	
経営学部					
経営学科			経営学科		
昼間主コース	115		昼間主コース	115	
夜間主コース	20		夜間主コース	20	
経営法学科					
経営法学科			経営法学科		
昼間主コース	95		昼間主コース	95	
夜間主コース	20		夜間主コース	20	
理学部					
数学科	50	→	数学科	50	
物理学科	40		物理学科	40	
化学科	35		化学科	35	
生物学科	35		生物学科	35	
地球科学科	40		地球科学科	40	
生物圏環境科学科	30		生物圏環境科学科	30	
医学部					
医学科	105		医学科	105	
看護学科	80		看護学科	80	
薬学部					
薬学科	55		薬学科	55	
創薬科学科	50		創薬科学科	50	
工学部					
電気電子システム工学科	88		電気電子システム工学科	88	
知能情報工学科	72		知能情報工学科	72	
機械知能システム工学科	90		機械知能システム工学科	90	
生命工学科	52		生命工学科	52	
環境応用化学科	52		環境応用化学科	52	
材料機能工学科	51		材料機能工学科	51	
芸術文化学部 芸術文化学科	115		芸術文化学部 芸術文化学科	115	
富山大学大学院					
人文科学研究科					
文化構造研究専攻(M)	5			0	平成23年度より学生募集停止
地域文化研究専攻(M)	5			0	平成23年度より学生募集停止
			<u>人文科学専攻(M)</u>	8	専攻の設置(事前伺)
教育学研究科					
学校教育専攻(M)	6			0	平成23年度より学生募集停止
教科教育専攻(M)	32			0	平成23年度より学生募集停止
			<u>人間発達科学研究科</u>		研究科の設置(事前伺)
			<u>発達教育専攻(M)</u>	13	
			<u>発達環境専攻(M)</u>	13	
経済学研究科					
地域・経済政策専攻(M)	4		<u>経済学研究科</u>		
企業経営専攻(M)	4		<u>地域・経済政策専攻(M)</u>	6	定員変更予定(概算要求)
			<u>企業経営専攻(M)</u>	12	定員変更予定(概算要求)
			<u>芸術文化学研究科 芸術文化学専攻(M)</u>	8	研究科の設置(意見伺)
生命融合科学教育部					
認知・情動脳科学専攻(D)(4年制)	9		生命融合科学教育部		
生体情報システム科学専攻(D)	4		認知・情動脳科学専攻(D)(4年制)	9	
先端ナノ・バイオ科学専攻(D)	4		生体情報システム科学専攻(D)	4	
			先端ナノ・バイオ科学専攻(D)	4	
医学薬学教育部					
医科学専攻(M)	15	→	医学薬学教育部		
看護学専攻(M)	16		医科学専攻(M)	15	
薬科学専攻(M)	35		看護学専攻(M)	16	
生命・臨床医学専攻(D)(4年制)	18		薬科学専攻(M)	35	
東西統合医学専攻(D)(4年制)	7		生命・臨床医学専攻(D)(4年制)	18	
生命薬科学専攻(D)	18		東西統合医学専攻(D)(4年制)	7	
			生命薬科学専攻(D)	18	
理工学教育部					
数学専攻(M)	12		理工学教育部		
物理学専攻(M)	12		数学専攻(M)	12	
化学専攻(M)	10		物理学専攻(M)	12	
生物学専攻(M)	10		化学専攻(M)	10	
地球科学専攻(M)	10		生物学専攻(M)	10	
生物圏環境科学専攻(M)	10		地球科学専攻(M)	10	
電気電子システム工学専攻(M)	33		生物圏環境科学専攻(M)	10	
知能情報工学専攻(M)	27		電気電子システム工学専攻(M)	33	
機械知能システム工学専攻(M)	33		知能情報工学専攻(M)	27	
物質生命システム工学専攻(M)	60		機械知能システム工学専攻(M)	33	
数理・ヒューマンシステム科学専攻(D)	5		物質生命システム工学専攻(M)	60	
ナノ新機能物質科学専攻(D)	6		数理・ヒューマンシステム科学専攻(D)	5	
新エネルギー科学専攻(D)	5		ナノ新機能物質科学専攻(D)	6	
地球生命環境科学専攻(D)	5		新エネルギー科学専攻(D)	5	
			地球生命環境科学専攻(D)	5	

教育課程等の概要

(大学院芸術文化学専攻芸術文化学専攻)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
共通科目	<造形表現> 造形表現特論	1 前		2		○			3	1					オムニバス
	<工芸> 工芸技術特論	1 前		2		○			2						オムニバス
	<建築・デザイン> デザイン学特論	1 前		2		○			1						
	<芸術文化論> 芸術文化学特論	1 前	6	2		○			1						兼1
	人間学特論(1)	1 前		2		○				1					兼1
	日本伝統造形史特論	1 前		2		○					1				兼1
	国際文化関係特論	1 前		2		○									兼1
	グローバル文化特論	1 前		2		○									兼1
	地域システム特論	1 前		2		○				1					
	小計(9科目)	—		6	18	0				8	2				
専門科目	<造形表現> 平面表現特別演習A	1 前		2			○		1						
	平面表現特別演習B	1 後		2			○				1				
	平面表現特別演習C	2 前		2			○		1			1			
	平面表現特別演習D	2 前		2			○					1			
	立体表現特別演習A	1 前		2			○		1	1					オムニバス
	立体表現特別演習B	1 後		2			○			1					
	立体表現特別演習C	2 前		2			○		1						
	立体表現特別演習D	1 後		2			○		1						
	像情報処理特論	2 前		2		○				1					
	デジタルアート特論演習	1 後		2				○				2			オムニバス
	<工芸> 漆工芸特別演習A	1 前		2				○	1						
	漆工芸特別演習B	1 後		2				○	1						
	漆工芸特別演習C	2 前		2				○		1					
	漆工芸特別演習D	2 前		2				○		1					
	木材工芸特別演習A	1 前		2				○	1	1					共同担当方式
	木材工芸特別演習B	1 後		2				○	1						
	木材工芸特別演習C	2 前		2				○	1						
	金属工芸特別演習A	1 前		2				○	1	1					共同担当方式
	金属工芸特別演習B	1 後		2				○	1						
	金属工芸特別演習C	2 前		2				○		1					
	<建築・デザイン> デザインマネジメント特論演習	2 前		2				○		1					
	デザイン特別演習A	1 前		2				○	1	1					オムニバス
	デザイン特別演習B	1 後		2				○	1	1					オムニバス
デザイン特別演習C	2 前		2				○	1	1					オムニバス	
建築設計特論	1 前		2			○		2						オムニバス	
建築設計特論演習A	1 前		2				○	2						オムニバス	
建築設計特論演習B	1 後		2				○	2						共同担当方式	
建築設計特論演習C	2 前		2				○	1		1				共同担当方式	
木質構造特論	1 後		2			○		1							
木質構造特論演習	2 前		2				○	1							

教育課程等の概要														
(芸術文化学部 芸術文化学科)														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
教養教育科目	教養教育科目													
	(リテラシー科目)													
	イングリッシュ・コミュニケーション入門1	1 前	1					○		1				兼1
	イングリッシュ・コミュニケーション入門2	1 後	1					○		1				兼1
	イングリッシュ・コミュニケーション中級1	2 前		1				○		1				兼1
	イングリッシュ・コミュニケーション中級2	2 後		1				○		1				兼1
	英文表現・理解A-1	1 前	2					○		1		1		
	英文表現・理解A-2	1 後	2					○		1		1		
	英文表現・理解B-1	2 前		2				○		1				
	英文表現・理解B-2	2 後		2				○		1				
	中国語会話Ⅰ	1 前		2			○			1				兼2
	中国語会話Ⅱ	1 後		2			○			1				兼1
	中国語作文Ⅰ	1 前		2			○			1				兼1
	中国語作文Ⅱ	1 後		2			○			1				
	中国語読解Ⅰ	2 前		2			○			1				
	中国語読解Ⅱ	2 後		2			○			1				
	フランス語A1	1 前		1			○							兼1
	フランス語A1G	1 前		1			○							兼1
	フランス語A2	1 後		1			○							兼1
	フランス語A2G	1 後		1			○							兼1
	情報処理基礎	1 前	2					○		1	2	1		
	コンピュータのしくみ	1 後		2				○		1	1	1		
	情報処理応用	1 後		2				○			2	1		
	健康スポーツⅠ	1 前		1					○	1			1	兼1
	健康スポーツⅡ	1 後		1					○	1			1	
	健康スポーツ論	2 後		2			○			1				
	芸術文化リテラシー	1 前		1			○			1	5			
	(立山マルテヴァース)													
	感性をはぐくむ	1・2・3 後		2			○			5				兼5 オムニバス
	富山学ーわたしの富山	1・2・3 後		2			○			2				兼1 オムニバス
	心(こころ), 身体(からだ), そして生命(いのち)	1・2・3 後		2			○							兼1 オムニバス
	(教養科目)													
	中国の言語と文化	3 後		2			○			1				
	世界の英語	2 後		2			○			1				
	英米文学入門	2 後		2			○				1			
	思想と倫理	1 後		2			○							兼1
	こころの科学	1 後		2			○							兼1
	歴史の世界	1 前		2			○							兼1 オムニバス
	ボランティアの世界	2 後		2			○			1	1			
	ジェンダー	1 前		2			○							兼1
	社会理論と現代	1 前		2			○							兼1
	法と政治	1 前		2			○							兼1
	産業と経済	1 前		2			○							兼1
	日本国憲法	1 後		2			○							兼1
	身近な医学	2 前		2			○							兼1
情報の世界	1 前		2			○					1			
建築とリサイクル	1 後		2			○			1					
化学物質の世界	1 前		2			○				1				
生命環境	1 後		2			○					1		兼1	
小計 (45科目)			10	69	0				11	9	2	1	0	兼20

メディアアート制作論	2 前	2		○				1					
伝統芸能論	3 前	2		○			1						
伝統文化資料研究	3 後	2			○		1						
英米演劇演習	3 前	2			○			1					
劇場舞踊論演習	2 後	2			○				1				
都市計画と文化	3 前	2		○			1						
社会における文化マネジメント	3 前	2		○								兼 1	
国際観光論	3 前	2		○			1						
観光産業論	3 後	2		○			1						
観光企画演習	3 後	2			○		1						
小計 (227科目)	—	0	452	0	—	—	24	17	6	4	0	兼 18	
[卒業研究・制作] 卒業研究・制作	4 通	8				○	21	15	4				
小計 (1科目)		8	0	0			21	15	4				
合計 (273科目)	—	18	521	0	—	—	25	17	6	4	0	兼 34	
学位又は称号	学士 (芸術文化学)			学位又は学科の分野			美術関係, 情報関係, 工学関係, 経済学関係						
卒業要件及び履修方法							授業期間等						
<ul style="list-style-type: none"> ・ 教養教育科目 (共通基礎科目) 12単位以上 (立山マルチヴァース講義) 2単位以上 (教養科目) 12単位以上 (教養教育科目) 4単位以上 計 30単位以上 ・ 専門教育科目 (学部共通科目) 20単位以上 (基幹科目及び展開科目) 40単位以上 うち、(基幹科目) 10単位以上 うち、(展開科目) 10単位以上 (専門教育科目) 26単位以上 (卒業研究・制作) 8単位以上 計 94単位以上 合計124単位以上 ※本学部は、1学科5コース制であり、同一授業科目がコースにより「必修」や「選択必修」又は「選択」となっている。							1学年の学期区分		2 学期				
							1 学期の授業期間		15 週				
							1 時限の授業時間		90 分				

授 業 科 目 の 概 要				
(大学院芸術文化科学研究科 芸術文化学専攻)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
共通科目	造形表現特論	<p>本授業は講義形式である。環境造形表現の概念や特質を、内外の美術史、美学観により解説し、現況の在り方、必然性、社会性の認識という観点から論及する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 安達博文 担当/第1回、第8回、第12回～第15回 計6回)ここでは国内外の画家の作例を通して様式、技法的な観点から絵画表現とは何かを考える。</p> <p>(2 後藤敏伸 担当/第1回、第2回～第4回、第8回、第15回 計6回) 環境造形、或はパブリックアートという概念に於いて、表現の可能性やその方向性について時代性を考慮しつつ講義する。</p> <p>(5 中村滝雄 担当/第1回、第5回～第8回、第15回 計6回) ここでは国内外のアーティストの作品例を通して制作コンセプト、様式、技法的な観点から「個性」とは何か、「表現するとは何か」を考える。</p> <p>(15 齊藤晴之 担当/第1回、第8回～第11回、第15回 計6回) 現代の工芸美術の作例を通して様式、技法的な観点から工芸美術に於ける平面・立体表現について考える。造形において形を写し取る写実表現と主要な要素の把握と簡略化による造形表現について、実際の例を提示しながら理解を深める。</p>	オムニバス方式	
	工芸	工芸技術特論	<p>本授業は講義形式である。古くから漆工芸と木材工芸は相互に密接な補完関係を持って発展してきた。本授業は漆工芸を専門とする3 林暁と木材工芸を専門とする4 小松研治の二人がオムニバスで講義する。授業の前半7回は漆工芸に関して3 林暁が、中国(春秋から漢時代)や日本国内で発達してきた漆工芸の歴史、そして日本独自に発達した漆素地造形技術や蒔絵技術について具体例を挙げながら講義する。後半7回は、4 小松研治が指物、挽き物、削り物、彫り物といった日本の木材加工技術の特色や海外からの影響について、木製の椅子や漆器の素地等の例を挙げながら講義する。なお、15回目は両者が揃ってレポート発表会を行い授業をまとめる。</p>	オムニバス方式
	建築・デザイン	デザイン学特論	<p>本授業は講義形式である。都市のイメージ形成に影響を与える要素として屋外広告物を取り上げ、景観の影響度を量的に把握する。また、屋外広告物を成立させている商業行為やマーケティングコミュニケーションについての理解を深め、商業振興策の中で景観の質を向上させる屋外広告物像を描き、それを実現化する広告企画やしくみの立案などの社会的デザイン手法について学ぶ。</p>	
	芸術文化論	芸術文化学特論	<p>本授業は講義形式である。建築的環境を含めた、広い意味での造形芸術に共通する文化環境としての課題を概観し、その実践的デザイン・評価・管理において、歴史的文化的基礎に立つ芸術文化学の果たすべき役割は、本来的にはどのようなものであるはずなのかを主題とする。地域や場所に関わる気候・地形・風土、経済・政治・生活世界など様々な条件(意味)が収斂する固有な形式(類型)として生成される意味的環境である造形芸術が、個々の人間の知覚や感性、経験や知識の基礎になり、そしてその個人が属する共同体の文化の基盤になっているという視座から、芸術文化学的営為の豊かな意味を解説する方法と、それを歴史性の連続の中から創造する手立てを講じる。</p>	
		人間学特論(1)	<p>本授業は講義形式で行う。西洋古代・中世哲学思想を素材に、人間による「制作」の可能性と限界について考察を加える。その際に、古代ギリシア哲学の根本的なトピックであり、プラトンの『ティマイオス』を一つの到達点とする世界生成論と、固有の理論的基盤を中世哲学に提供したキリスト教的創造論の基礎となったアウグスティヌスの創世記解釈とを手がかりとして考察を進めたい。</p>	
		日本伝統造形史特論	<p>本授業は講義形式である。今日一般に、日本の美術、工芸、造形芸などの視覚造形表現の領域において長い歴史を有する「伝統」的ジャンルと考えられているもののほとんどは、実は、明治期から昭和前期にかけての時期に、近世期以前の文化資源を再編するか、もしくは、過去の類例に倣いつつ新たに「創出」することで成立したものであった。また、これら各ジャンルの確立と消長の歴史は、そのまま広義の「日本美術」や「日本美術史」の枠組みの近現代各期における増大、縮小を促す要因になったといえる。本授業においては、このような観点から、「日本」の代表的な各「伝統造形」ジャンルの前史、成立背景、発展と革新の過程、さらには継承の仕組みの史的分析をおこない、そのうえで、ひろく「伝統」的なるものの文化資源化の可能性と、その未来に向けての持続可能な展開のありようを検討するものである。</p>	

共通科目	芸術文化論	国際文化関係特論	本授業は講義形式である。国際関係理解の文化理論とその応用としての事例研究について学ぶ。なかでも、グローバリゼーションと呼ばれる世界環境の変容動態認識を本講義の出発点とし、履修者と相互理解を深めながら、文化に関する研究課題について講じる。なかでもオリエンタリズム、文化と文明をめぐる対抗、メキシコ壁画運動の政治性などに言及する。	
		グローバル文化特論	本授業は講義形式である。人、モノ、カネ、情報の国境を越える流れは、近代世界がいつの時代にも経験してきたことである。この授業では、国境を越える人の移動と文化の変容を中心に、特に現代の大衆文化における越境性と移民の文化的創造力に焦点をあてて、いわゆる経済学、社会学、政治学など社会科学を横断する文化研究の動向を踏まえた講義を行う。移民の文化が、近代国民国家の文化的アイデンティティとの不断の摩擦にさらされてきた歴史的事実を踏まえて、「多文化共生」や「多文化主義」が直面している困難や文化的摩擦の具体的事例をとりあげながら、文化的マイノリティとしての移民の文化の意義を論ずる。また、植民地主義からポストコロニアリズム、ポスト冷戦とあらたな地域紛争といった世界史の流れにともなう文化的な課題や、インターネットに代表されるグローバルなコミュニケーション環境についても論ずる。	
		地域システム特論	本授業は講義形式で行う。地域づくりは、多様な資源と様々な主体が、重層的かつ複雑化しながら、市場の原理に即した地域システムを形成することで、その実践を可能としている。そこで、地域システム研究は、具体的事例にもとづく先行研究より、地域資源、実施主体の各観点から地域づくりに必要な仕組みを体系的に整理する。 まずは、21世紀の地域づくりの新しい動向を概説した上で、具体的事例をもとにした、地域資源別の地域づくり、主体別の地域再生への取り組み状況を概説することで、地域システム研究の基礎的知識を得る。つぎに、これからの地域づくりに不可欠な、ダイヤモンドサイド・アプローチによる先行研究を学ぶことで、地域システム形成の理論化に求められる研究手法や、地域システム形成に向けた戦略、戦術構築の手法を学ぶ。	
専門科目	造形表現	平面表現特別演習A	本授業は演習形式である。基底材や地塗り塗料によって絵の具の発色効果、肌合いは大きく異なる。本授業では白亜地パネルを用いて油彩、テンペラ、アクリルなどの絵の具を用いた絵画研究制作を行う。 制作に先立ち、履修生とで目的とする研究制作の検討を行った後、エスキース制作及びタブロー制作を行う。 ・白亜地パネルの調整 ・エスキース制作：ガッシュ、アクリル絵の具等を主体とした制作を15～20点程度 ・タブロー作品サイズ：原則として100号程度 1点	
		平面表現特別演習B	本授業は演習形式である。 日本画の画材、技法は各自のイメージの表現において深く研究されるべきである。 本授業では岩絵具、箔、和紙といった日本画画材を用い、各自のイメージにあった制作方法を探求、試行する。また、独特の素材を取り扱う中で、表現と画材の関連性を考察する。 小下図制作を通して各自の研究制作テーマについて検討を行った後、本画制作に取り組む。 ・下図制作：水彩絵具、アクリル絵具、色鉛筆等を主体とした小下図制作と鉛筆、木炭等による大下図制作。 ・本画作品サイズ：原則として100号程度 1点	
		平面表現特別演習C	本授業は演習形式である。現代の絵画表現は千差万別である。画家は自らのイメージを作品として具現化するために様々な素材や表現形体を試み、独自の制作法を打ち出すべく研究を行う。 本授業では基底材、描画材料を特に限定せず、履修生のテーマにあった素材を探り、その特性を活かした各自の表現を試みる。 制作に先立ち、履修生とで目的とする研究制作の検討を行った後、エスキース制作及びタブロー制作を行う。 ・エスキース制作：ガッシュ、アクリル絵の具等を主体とした制作を15～20点程度 ・タブロー作品サイズ：原則として100号～150号 1点	
		平面表現特別演習D	本授業は演習形式である。 日本画の表現技法は、各自の試行錯誤によってより一層研究されるべきである。 本授業では日本画における絵画表現の特性への理解を深めながら、各自のテーマにあった制作方法を試行し、探求する。また、独特の素材を取り扱う中で、表現と画材の可能性を研究する。 小下図制作を通して各自の研究制作テーマについて検討を行った後、本画制作に取り組む。 ・下図制作：水彩絵具、アクリル絵具、色鉛筆等を主体とした小下図制作と鉛筆、木炭等による大下図制作。 ・本画作品サイズ：原則として100号程度 1点	

専 門 科 目	造 形 表 現	立体表現特別演習 A	<p>本授業は演習形式である。木材、粘土、樹脂、乾漆等の素材と道具立て、加工表現技術を有効に利用しながら、これからの造形立体表現が目指す方向性を提示する。そのための、独自の造形に対する考えをまとめ、それを具現化する立体物の研究制作を行う。</p> <p>自然界にある形やものの成り立ちをしっかりと把握し、それらの中から、必要不可欠の要素を見つけ出し、形の表現によって制作者の意図を簡潔に伝えることを目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(2 後藤敏伸/8回) 環境造形、或はパブリックアートという概念に於いて、立体表現の可能性やその方向性について時代性を考慮しつつ研究制作する。</p> <p>更に、研究制作に要する道具等の正確な仕立てや、使用法についても再度確認して行く。</p> <p>(15 齊藤晴之/7回) 自然物の中から普遍的な量やフォルムの基となる構造、成り立ちを見つけ出し、それらを組み合わせながら基本的な立体の中に生命感や力の流れを表現し、それぞれの素材が持つ特性を引き出す形として完結させる。</p>	オムニバス方式
		立体表現特別演習 B	<p>本授業は演習形式である。現代の造形表現について資料を収集し、分類整理しながら、それぞれが目指す方向性について現代社会に及ぼした意義を考察することにより、次代の表現として求められる形態を立体表現の研究制作物として提示する。</p> <p>時代の中でさまざまな試みられてきた立体表現について体系的に理解ながら次の展開に繋がる表現を提示することを目指す。</p> <p>彫刻表現や工芸美術の表現において、現代の多くの作家が試みている各種表現方法について資料収集し、表現意図との繋がりを考察し、現代の時代性を反映した表現方法について独自の特徴ある表現形態について提案する。</p>	
		立体表現特別演習 C	<p>本授業は演習形式である。修了制作へ導く為の完成度や、存在の方法論を明確にし、任意の環境を設定した上で素材の選択、技法を決定して行く。環境との融合性を目指し研究制作する。公募展への応募を視野にいれ、完成後は出品することを義務づける。</p>	
		立体表現特別演習 D	<p>本授業は演習形式である。学部教育で得たこれまでの幅広い研究成果により築き上げてきた制作コンセプトを更に専門的なテーマに従って展開させ、自身にとっての「美」を探求する。金属素材を用いて研究制作に当たるこの授業では、サブテーマとして金属素材から受ける刺激(質感、存在感、量感など)ならびに金属の性質である塑性(加工性など)を駆使して作品を研究制作し、創作力を育むと同時に、自らの世界観を表現する。その手段として溶接による接合・切断、研磨ならびに表面処理や打撃による圧延や曲げ加工・絞り加工などの金属造形に関わる加工技術を取り込んで研究制作する。</p> <p>制作する分野あるいは表現方法は、金属立体造形、金属彫刻、オブジェ、インスタレーションなど。</p>	
		像情報処理特論	<p>像情報処理特論では、画像、動画、音などの像情報に対する入出力の説明から始める。そして、コンピュータやインターネット上でのデータの扱いや立体などのデータについても説明を行う。画像については、画像生成(Computer Graphics)のアルゴリズムからカメラ等から得た画像の処理を行い認識するまでのアルゴリズムを講義する。同様に、動画像や音についても、使用されるアルゴリズムを説明する。そして、像情報の検出、表現、認識、理解、生成、評価などから応用できるようにする。</p>	
		デジタルアート特論演習	<p>本授業は演習形式である。デジタル素材を使った演習を通して、映像、サウンド、インタラクティブテクニックなど、メディアアートを構成する様々な要素について研究/制作する。また、デジタル技術を使ったメディアインスタレーション作品を完成させ、自分の思考を具現化する表現能力を磨き、展示発表する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(26 西島治樹 担当/9回) デジタル映像・音響表現(撮影, 編集, 録音, 合成加工), 作品研究制作</p> <p>(27 米川寛 担当/8回) デジタルメディアインスタレーション技術, インタラクティブアート技術</p> <p>(全教員担当/2回) インTRODクション, 発表会(各教員の担当回数を含む)</p>	オムニバス方式
		漆工芸特別演習 A	<p>本授業は演習形式である。日本の文化の中で育まれた器の形を考え、学部の授業では組み入れられていない乾漆技法を学び、器物を粘土や石膏などを用いて立体的にデザインする。原形制作にはアクリルの引き型を使って油土を成形し、石膏原型に置き換えて乾漆器を作るための型造りの工程を通して専門技術・知識の向上を図る。</p>	

漆工芸特別演習 B	<p>本授業は演習形式である。日本の文化の中で育まれた器の加飾を考え、蒔絵や平文、螺細などの技法で過去の名品の部分模造を行う。加飾にはあらかじめ用意した手板を用い、各人の選んだ過去の作品の技術やデザインなどを詳細に検討し、伝統的な技術を順守しつつ現代という時代性も考慮しながら研究制作をする。</p> <p>キーワード：加飾・蒔絵・螺細・平文</p>	
漆工芸特別演習 C	<p>本授業は演習形式である。現代の美術造形表現に貢献するため、漆素材に関連する技術や知識を最大限に応用しながら、美術造形の分野で有効な表現法、利用法等の開発と、表現技術の幅広い展開について可能性を模索する。それらの成果を作品研究制作において完結させる。造形表現について資料収集を行ない、これからの表現に求められる方向性を考察し、漆に関連する素材と表現が果たすべき役割を明確にしなが、具体的に造形作品として視覚化するための研究制作を行う。</p>	
漆工芸特別演習 D	<p>本授業は演習形式である。現在の漆工芸の置かれている位置を、社会情勢、市場、文献などの調査、研究から把握する事を主な目的とし、その調査研究結果に基づき、現状にとって有益である漆工芸品のあり方を、試作品の研究制作により提案する。試作品の研究制作により、漆素材の特性の理解を深める。</p>	
木材工芸特別演習 A	<p>本授業は演習形式である。人間が生活する環境の中に潜む事象を深く観察し、問題解決への提案を「もののデザイン」を通して行う。具体的には、持続可能な社会の構築にむけてひとつの課題である地域材（地場産の木材）の利活用をテーマとした、家具デザイン・福祉機器デザイン・プロダクトデザイン分野によるデザイン提案を行う。市場調査、問題点の抽出、企画・立案、素材・加工方法の検討、人間工学観点からのシミュレーション等を通し、プロトタイプモデルの研究制作を行う。</p> <p>全15回 共同担当授業：家具デザイン・福祉機器デザインは 11 丸谷芳正が担当し、プロダクトデザインは 18 渡邊雅志が担当する。</p>	共同担当方式
木材工芸特別演習 B	<p>本授業は演習形式である。授業の前半では、事前に用意した「ワゴン」の図面を配布し、そのデザインに従って正確に研究制作する。配布する図面からは、木材を使用するからこそ必要になる接合構造や、部材の選択方法などの情報を正確に読み取り、3次元の立体物として理解する作業を徹底して行う。次に製品の試作を通して作業全体を把握するとともに、制作上の疑問や問題点を洗い出す作業を行う。また、安全性や作業効率、加工精度を考慮して現実的な制作工程計画を自ら立てる。</p> <p>授業の後半では、デザインに適した材料の選択、審美性を考慮した部材取り、木材加工機械による安全で精度の高い加工技術について解説し、専門知識を深めながら研究制作を行う。特に部材の高い加工精度を求めめるために、ジグや固定具などの補充具を設計製作して活用する効果を研究する。</p>	
木材工芸特別演習 C	<p>本授業は演習形式である。授業では、「引き出しの付いた小箱」をテーマとして限られた時間内で少量反復製作を試みる。少量とは10個以上を条件とし、本授業時間内で完成することを目指す。テーマに沿った製品は、この条件下で可能なものとしてデザインし、そのデザイン展開プロセスで重要な点について解説する。実際の制作に入る前の事前準備として、限られた時間の中で製作するための工程計画表を自ら立案し、この計画に沿った研究製作を試みる。また、正確な部材加工のために、部材や道具の効率的な配置環境、手道具と対応した留め定規や、加工機械と対応したジグ・固定具の設計制作にも積極的に関わり、審美性を最重要視した一品制作とは異なる製作方法を研究する。</p>	
金属工芸特別演習 A	<p>本授業は演習形式である。鋳金・鍛金・彫金といった金属工芸技法を複合的に用い、学生自身が以下の工程に主体的に取り組む。工程は、研究計画立案、工程フローチャート作成、合金材料作成、鋳金、鍛金、彫金、組み立て、着色、仕上げである。金属工芸技法の中から学生が研究目的に応じて複合的に計画する。ものづくりには失敗がつきものである。しかし、失敗の原因解明と改善方法の創出、再実行、確認の繰り返しにより技術が進歩してきた。そのプロセスは次世代の新たな創造に結びつく。このことは学生が時間をかけて取り組む重要な学習ポイントとなる。</p> <p>5 中村滝雄：金属工芸技術の鍛金及び彫金技法を担当する。 19 清水克朗：金属工芸技術の鋳金及び彫金技法を担当する。</p>	共同担当方式
金属工芸特別演習 B	<p>本授業は演習形式である。学部教育で得たこれまでの幅広い研究成果により築き上げてきた金属工芸（鍛金）を更に高度なレベルのテーマに従って内容を展開させ、金属工芸への深い理解と鍛金の技術を探求する。鍛金技術と金属素材を用いて研究制作に当たるこの授業では、サブテーマとして金属素材から受ける刺激（質感、存在感、量感など）ならびに金属の性質である塑性（加工性など）を駆使して金属工芸作品を研究制作し、創作力を育むと同時に、自らの世界観を表現する。その手段として溶接による接合・切断、研磨ならびに表面処理や打撃による圧延や曲げ加工・絞り加工などの加工技術を取り込んで研究制作する。</p> <p>研究制作する分野は、金属工芸、インテリア・エクステリア、オブジェなど。表現技法は手絞り加工、鍛造技法、溶接技法など。</p>	

	金属工芸特別演習 C	<p>本授業は演習形式である。鑄造技法を主に、学生自身が以下の工程に主体的に取り組む。工程は、研究計画立案、工程フローチャート作成、原型制作、鑄型制作、金属熔解、注湯、仕上げ着色で、鑄型制作は、込型鑄造技法、輻型鑄造技法、惣型鑄造技法、生型鑄造技法、石膏型鑄造技法、精密鑄造法（コンピュータによるモデリングを含む。）、これらの複合鑄造技法のなかから学生が研究目的に応じて選択する。鑄造には失敗がつきものである。しかし、失敗の原因解明と改善方法の創出、再実行、確認の繰り返しにより技術が進歩してきた。そのプロセスは次世代の新たな創造に結びつく。このことは学生が時間をかけて取り組む重要な学習ポイントとなる。</p> <p>作品は学生が継続して追求してきたテーマで制作し、15cm×15cm×15cm以内の大きさの比較的小さな作品とする。原型制作に時間をかけ、完成度の高い制作意図の明確な作品を制作する。</p>	
	デザインマネジメント特論演習	<p>本授業は演習形式である。デザインマネジメントを狭義の捉え方ではなく、企業経営の一環さらには社会への変革要素ととらえ、企業規模、業種、国情の違いによる「経営とデザインマネジメントの関わり」を学ぶ。さまざまな実例の現状から、個々の問題 / 課題把握を通して、それらの「あるべき姿」のシミュレーションを行い、業態に応じた企業経営とデザインマネジメントの構造把握とその対応を設定した仮想課題を通して理解し体得する。</p>	
	デザイン特別演習 A	<p>本授業は演習形式である。視覚情報を用いたコミュニケーション手法について学ぶ。視覚情報の基本要素であるタイポグラフィ、シンボルマーク、色彩の中からエレメントを設定し、ビジュアルデザインとしての歴史的活用事例や表現特性について調査・分析を行う。また、その表現特性を活用した視覚作品を研究制作する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(7 武山 良三/第1回～第9回、第15回 計10回) 視覚情報を用いたコミュニケーション手法の基本理論およびデザイン調査・分析法、ならびに得られた考察からコンセプト展開する手法について担当する。</p> <p>(20 沖 和宏/第1回、第7回、第10回～第15回、計8回) 立案されたコンセプトから具体的なデザインを研究制作すると共に、効果的なプレゼンテーションにまとめ上げる手法を担当する。</p>	オムニバス方式
専 門 科 目	建築・デザイン	<p>本授業は演習形式で行う。修士課程修了制作準備のため、その前段階として、インダストリアルデザインの基盤となるデザインリサーチ、コンセプトの企画・立案の方法論、及び造形研究と人間工学的な観点による、スタンダードなデザインプロセスによるユニバーサルデザインへのアプローチを学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(8 長山 信一/11回) デザインリサーチ・人間工学・ユニバーサルデザイン研究担当。</p> <p>(21 矢口 忠憲/11回) 造形研究分野及びプレゼンテーション担当。</p> <p>●テーマに関する共通の課題検討時には2名共に参加する。</p>	オムニバス方式
	デザイン特別演習 C	<p>本授業は演習形式である。日本、米国、西欧などの地域に於けるデザインの発展経緯とその概念の違いを比較検討し、日本が成し得るデザインの役目は何かを様々なデザイン領域から考察し、演習を通じて言語化ないしは具現化による概念の形成と熟考を行う。国際的視座から見て、特色ある日本のデザイン概念を資源として広く世界で活用できるデザイン生成装置に昇華する方法論の研究を指導する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(20 沖 和宏 担当/第1回から第8回、第15回) 集積したデータから情報の意義を抽出し、それを言葉やビジュアル・ボキャブラリーなどのアイデア・ソースに変換する手法を担当する。</p> <p>(9 前田一樹 担当/第1回、第9回から第15回) ここではデザインとは何か、デザインの目的とは何か等、作る目的から判断する基礎デザインを考える。</p>	オムニバス方式
	建築設計特論	<p>講義形式の科目である。</p> <p>家具・インテリア・建築設計において、必要な用途の把握、素材、構法、設備の概要を踏まえた上で、環境デザインのための、実践的な意匠論を展開する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(10 貴志雅樹/9回、第7回～第15回)</p> <p>空間の構成法を基本とした建築の意匠論である。建築設計において、ビルディングタイプ別の計画論、素材、構法、設備システムと建築意匠の関係を理解し、環境デザインのための現実的な意匠設計を実践するための能力を身につけさせる。</p> <p>(11 丸谷芳正/7回、第1回～第6回、第15回)</p> <p>ゾーニング、プランニング、ファニチャーレイアウト、ファーニッシングまでの室内空間構成法を基本とした意匠論。レジデンシャル、コントラクトなどマーケットタイプ別の計画論。色彩、家具、照明等と室内意匠の関係を理解し、現実的な意匠設計を実践するための能力を身につけさせる。</p>	オムニバス方式

<p>建築設計特論演習A</p>	<p>演習形式の科目である。 持続可能な社会の構築にむけて、人間を取り巻く環境のあり方を考察する。インテリア・家具から建築にいたるトータルな設計を、実践的トレーニングを通して行うアドバンス設計演習として、学生に設計の実務者としての能力を身につけさせる。設計実務者を招き、講習会を行う。 (オムニバス方式/全15回) (10 貴志雅樹/11回) 現実的な課題に則して、建築の長寿命を図る手法、用途変更の手法、社会的弱者に対するユニバーサルデザインの手法、省エネルギー化を図る手法等の探求と類型化を通して、人間を取り巻く環境の設計に生かす。 (11 丸谷芳正/10回) 建築の長寿命化を実現のための躯体を利用したインテリアデザインの手法、建築空間をより質の高い人間本位の空間にするためのインテリア・家具デザインの手法、外部・内部空間に関わらず人間と直接関わるもののデザインを通してヒューマナイズデザインを学ぶ。</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>建築設計特論演習B</p>	<p>演習形式の科目である。 「居住空間を中心に据えたコンパクトシティー」という観点から、地方都市の街づくりに対して提案をおこなう。ストリートファニチュアから街づくりに至るまで、トータルな設計を実践的トレーニングを通して行うアドバンス設計演習として、学生に実務者としての能力を身につけさせる。設計実務者を招き講習会を行う。 (全15回) (10 貴志雅樹) 地方都市における居住空間のあり方、地方の固有性を生かした建築のあり方を考察することにより、地方都市における「街づくり」と街の要素としての建築の関係を実践的な設計を通して提案する。 (11 丸谷芳正) 地域性を活かした「街づくり」と居住空間のあり方をインテリアデザインを通して考察する。また、ストリートファニチュアなどの外部環境デザイン、社会的弱者に対するユニバーサルデザイン、地域の伝統と新たなライフスタイルとの関係を考察し実践的な設計を通して提案を行う。</p>	<p>共同担当方式</p>
<p>建築設計特論演習C</p>	<p>演習形式の科目である。 自然環境保全のため、循環型社会に適合する建築素材として木材を捉え、木構造の可能性を追求し、大規模木造建築の提案を行う。木造建築のトータルな設計を実践的なトレーニングを通して行うアドバンス設計演習として、学生に設計の実務者としての能力を身につけさせる。設計実務者を招き講習会を行う。 (全15回) (10 貴志雅樹) 地場産木材利用という観点から、学生各自プログラムを作成する。各自が設定したビルディングタイプ毎に、木構造のシステムを考察し、木造建築を実践的な設計をとおして提案する。 (28 横山天心) 大規模建築の構造に不可欠なストラクチャーエレメントの構成を、力学的観点及び意匠的観点の双方から検討しながら設計をすすめ、木造建築の特性を活かしかつ合理的な階層性を有する構造システムを各自考案する。</p>	<p>共同担当方式</p>
<p>木質構造特論</p>	<p>本授業は講義形式である。生物資源である木材の利用から廃棄のサイクルと樹木の植生生長から伐採のサイクルとを同期させることで、将来にわたって、木材を持続的に利用し環境を保全する、木材利用の理想循環系を構築するために、木質構造の構造特性は如何にあるべきかを理解する。そのために、木材の生物学的特徴を知ることから始め、森林の保全、木材の物理的性質、木材の製材と調整、大工技術の工学的解明、木造建築の接合性能、など木質構造を支える木造文化ともいえる背景から、樹木の成長に合わせた木質構造建築の長期耐用を実現する木質構造の構造特性と設計理念を総合的に講義する。</p>	
<p>木質構造特論演習</p>	<p>本授業は演習形式である。長期に耐用された木造住宅を詳細に調べた記録を参照しながら、富山県に受け継がれている地域型木造軸組住宅を対象としたフィールドワークによる調査を通して、木質構造の特性と長期耐用を実現させた背景を理解する。 具体的には、富山県内で伝統的に建造されている木造住宅を対象とした地域型木造軸組住宅についての既往の研究について、木材の使われ方、林業との関係、大工技術、住まい手のニーズ、地域型木造軸組住宅の理念、などについて学習する。ついで、富山県内で長期耐用された木造住宅を学習成果から派生した興味ある検討項目について現地調査を実施し、結果をまとめることにより、木質構造の環境に対する有意性を理解する。</p>	

美学特論演習 I	<p>本授業は演習形式である。美学特論演習 I においては、美学のトピカルなテーマを選び、いくつかの論文を読み、討論を行う。参加者にはこのほかに、扱われる主要テーマにつながる他の論文について適宜、報告を求め、それをもとに討議する。扱われるテーマはその都度設定したいと考えているが、「自然美」「美的なもの」「物語」などを最初に扱いたい。そのため最初にドイツ近代美学の古典的なテキスト、カント『判断力批判 (Kritik der Urteilskraft, 1790)』を原書で読む。あわせてこのカントの自然観照の概念を援用して自らの論理を展開している現代英国の環境美学のテキスト、エミリー・ブレイディの『自然環境の美学 (Aesthetics of the Natural Environment 1988)』を読んで「自然美」について考察する。</p>	
美学特論演習 II	<p>本授業は演習形式である。美学特論演習 II においては、美学のトピカルなテーマを選び、いくつかの論文を読み、討論を行う。参加者にはこのほかに、扱われる主要テーマにつながる他の論文について適宜、報告を求め、それをもとに討議する。扱われるテーマはその都度設定したいと考えている。美学特論演習 II は美学特論演習 I と連続して行い、内容はより各論的なものを扱っていきたい。ここで読み進めていく古典的なテキストは F.W.J. シェリング『造形芸術の自然との関係について (Über das Verhältnis der bildenden Künste zu der Nature, 1806)』および『芸術哲学 (Philosophie der Kunst, 1802-03)』。この二冊を原書で読み、さらに現代の環境美学のテキスト、アーノルド・パーリアント編『環境と芸術 (Environment and the Arts 2002)』を読みながら、現代の環境美学に流れ込むロマン主義的な自然と芸術の考え方を再検討する。</p>	
都市・建築学特論演習	<p>本授業は演習形式である。インテリアから都市や景観にいたるまでの人間環境の全スケールを網羅する、単なる機能的構造的な工学システムではない、歴史的文化的概念としての建築とは、本来的にはどのようなものであるはずなのかを主題とする。その地域や場所に関わる気候・地形・風土、経済・政治・生活世界など様々な条件 (意味) が収斂する固有な形式 (類型) として生成される意味的環境である建築が、個々の人間の知覚や感性、経験や知識の基礎に、そしてその個人が属する共同体の文化の基盤になっているという視座から、この総合的な建築の豊かな意味を解説する方法と、それを歴史性の連続の中から創造する手立てに関して、豊富な事例の提示とそれについてのディスカッションを通じて実践的な演習を行う。</p>	
伝統芸能特論	<p>本授業は講義形式で行う。伝統芸能研究は、民俗学、歴史学、演劇学、音楽学など多岐にわたり、伝統芸能論として体系的に論ずることは難しい。そこで、伝統芸能の定義と範囲を設定し、これまで扱われてきた研究テーマと研究方法を概観することによって、伝統芸能論の体系化をめざす。</p> <p>まず、伝統芸能研究の基礎的知識を得るために、伝統芸能を古典芸能、民俗芸能、大衆芸能に大別して概説する。次に、これらの伝統芸能がどのように研究されてきたか、民俗学、音楽学、その他の先行研究を概観する。これらの基礎的な知識をベースとして、伝統芸能研究において、これまでに取り上げられてきたテーマ (伝統、伝播、伝承など) を一つ選び、具体的な事例をもとに、先行研究を整理し、アプローチの方法を学ぶ。</p>	
伝統芸能特論演習	<p>本授業は演習形式で行う。伝統芸能研究にとって重要なアプローチの一つにフィールドワークと民俗誌 (民族誌、音楽民族誌) の作成が挙げられる。この演習では、伝統芸能の具体例の一つあるいは、複数を取り上げて、実際に、フィールドワークを行い、民俗誌、民族誌、音楽民族誌等を基にして、伝統芸能に特化した伝統芸能誌を作成することを目標とする。</p> <p>まず、フィールドワークを実際に行うにあたって、必要な予備的知識として、民俗誌、民族誌、音楽民族誌を作成する目的とその内容を概観し、プロトコル (調査計画) をたてる。次に、フィールドワークを行い、資料を収集する。収集した資料の整理と分析方法を学ぶ。分析資料をもとに伝統芸能誌を作成する。最後に作成された伝統芸能誌についての口頭発表とディスカッションを行う。</p>	
日本伝統造形史特論演習	<p>本授業は演習形式である。「日本伝統造形史特論」で学んだ知識、史的考察態度を基礎として、前半は、主として明治期から昭和前期にかけての専門的な関連文献史資料の講読、分析をおこなうことで、文献史資料の批判的操作の能力を養い、後半は、「日本伝統造形史」研究の手法を身に付けたうえで、富山を中心とした北陸地域の課題に即して、受講生各自の現地調査に基づいての地域の「伝統造形」の過去、現在の歴史記述の実践とディスカッションをおこない、さらには未来に向けての地域文化資源活用の展望研究について演習する。</p>	
国際文化関係特論演習	<p>本授業は演習形式である。国際関係学の分析理論に関する主要文献の講読を通じて、グローバリゼーションと呼ばれる世界環境の変容動態認識を学ぶ。特に、本演習では国際関係と文化に関する研究課題について学び、かつ事例研究のための基礎的方法論の修得をめざす。</p>	

	グローバル文化特論演習	<p>本授業は演習形式である。現代の大衆文化が、国境を越える移民の文化なくしては成り立ちえなかった歴史と現在について、現代の大衆文化のなかでもとりわけ越境性の強い「ヒップホップ」を事例として取り上げて、最近の研究成果について、検討する。特に、ブラックカルチャーの伝統的な研究手法が、移民とその送り出し国・地域＝ルーツという二項対立の図式を前提としてきたのに対して、最近のトランスナショナルな大衆文化研究は、「ルーツ」という考え方をものを問い直す方向を提起してきた。この演習では、文化研究に大きな影響を与えてきた諸思想（たとえば、フランク・ファノン、エドワード・サイードなど）を踏まえつつ、ポール・ギルロイの『トランス・アトランティック』やヒップホップ文化をめぐる cultural criminology の議論などにも触れながら、文化とライフスタイルがグローバル化する社会システムに内在する階級、エスニシティ、ジェンダーをめぐる矛盾と定稿の表現としての側面に着目して、その意義を検討する。</p>	
特別研究	課題研究 I	<p>(1 安達 博文) 本授業は課題研究指導である。 特別研究（課題研究 I）は、履修する平面表現特別演習 A、平面表現特別演習 C の授業とともに、修了制作の予備段階としての研究制作を行うものである。 個々の制作におけるテーマ、コンセプト、表現様式の設定を機軸に、創造的な自己表現を達成するに適う材料の十分な検討を行った後、描画材料及び基底材を決定し、それぞれの絵画表現へと繋げる。この一連のプロセスの理解は将来に渡って創作活動が続けて行く上での重要な事柄である。 *エスキース制作：ガッシュ、アクリル絵の具等を主体とした制作を15～20点程度 *習作制作：80号～100号前後サイズ2点</p>	
	課題研究 II	<p>(1 安達 博文) 本授業は課題研究指導である。 特別研究（課題研究 II）は、履修した平面表現特別演習 A、平面表現特別演習 C 及び課題研究 I での授業における経験を活かした2年間の集大成としての修了制作となる。従って、これまでに行なってきた研究制作を更に発展的に捉え、類似の無い創造的作品制作となるよう種々の試作と検討を充分に行った後、各自のテーマに基づいたイメージの具現化を図る。授業にあたっては、授業計画を学生と共に協議し、エスキース制作から本制作の完成に至るまでは各自の研究内容に沿った制作指導を行う。 *エスキース制作：ガッシュ、アクリル絵の具等を主体とした制作を15～20点程度 *本制作－150号サイズ以上1点</p>	
	課題研究 I	<p>(2 後藤 敏伸) 本授業は課題研究指導である。課題研究 I が、修士課程に於ける集大成の序章である事を明確にし、研究ノートにより制作過程の把握を行う。制作段階の映像資料にも常に注意を払い、全ての資料をもとに環境造形、或はパブリックアートの形象を具現化し、公の評価を受ける。環境造形、或はパブリックアートという概念に於いて、立体表現の可能性やその方向性について時代性を考慮しつつ課題制作する。 造形環境の本質的理解と認識を前提に、課題研究としての造形完成度を高める。 社会性の認識を常に意識する。</p>	
	課題研究 II	<p>(2 後藤 敏伸) 本授業は課題研究指導である。課題研究 II が、修士課程に於ける集大成である事を明確にし、研究ノートにより制作過程の把握を行い、作品とともに提出する。制作段階の映像資料にも常に注意を払い、全ての資料をもとに環境造形、或はパブリックアートの形象を具現化し、公の評価を受ける。環境造形、或はパブリックアートという概念に於いて、立体表現の可能性やその方向性について時代性を考慮しつつ課題制作する。 造形環境の本質的理解と認識を前提に、課題研究としての造形完成度を高める。 社会性の認識を常に意識する。研究ノートの提出義務を負う。</p>	
	課題研究 I	<p>(3 林 暁) 本授業は課題制作指導である。乾漆技法による器の制作にテーマを絞り、作品の計画を学生と教員のミーティングを複数回行うことによって考える。それにより導きだされたデザインや技法を用いた作品制作課題を設定し、制作・研究を重ねる事により、伝統技術の習得を図り、漆工芸制作の能力を高める。 キーワード：漆工芸・伝統技法</p>	

課題研究Ⅱ	(3 林 暁) 本授業は修了制作指導であり、蒔絵や螺鈿などの加飾技術を用いて作品制作をする。制作研究計画を学生の希望や能力等を考慮しながら策定し、個々の制作・研究内容に応じた実技指導を行う。伝統的な技術や手法によって制作されたものが、現代に生きる人々の価値観にどのように響くかを自らの作品制作によって模索し、発表する事によりそのあり方を提案する。 キーワード：漆工芸・伝統・現代・創造性	
課題研究Ⅰ	(4 小松 研治) 本授業は課題研究指導を行う。授業では、家具や室内環境のためのデザインを考える際に、人が戸惑いの結果として残した痕跡を大きなヒントとして利用する方法を研究する。様々な痕跡を捕獲するフィールドワークからはじめ、その痕跡を残した行為のリアリティーを抽出して作品のデザインへと展開する工程を試みる。制作の段階では、具体化していく全プロセスを深く理解するとともに、デザインに応じた機能と樹種の選択、木目と形態に関する審美的調和、将来起こりうる木材の変形に対応した構造、制作環境や補助具を活用する加工技術等、木工に関する高い専門的知識と技能を深化させる。	
課題研究Ⅱ	(4 小松 研治) 本授業は課題研究指導を行う。授業では修士作品制作研究に向けて、家具の歴史や市場の調査、着想を表現するスケッチ、原寸の模型での検討、そして制作に関する手道具をはじめ加工機械での技術的指導を行い、機能性、審美性の面で完成度の高い作品に結実させて、ものづくりの役割を深く研究するとともに、将来の進路につなげることを目標とする。制作研究計画を各学生の履修歴、進路等を参考にしながら策定し、個々の制作・研究内容に応じた指導を行う。前期前半は発想と制作工程計画、前期後半と後期は実技指導に重点をおいて指導する。最終段階では作品完成に至る制作の研究記録ファイルを作成し、これを用いて研究・作品発表会を行う。	
課題研究Ⅰ	(5 中村 滝雄) 修士作品制作のため、その第一段階として先ず作品のテーマ設定ならびにアイデア展開の指導を行い、試作や模型制作による実験・検討を重ね、作品として具現させることを指導する。 制作する技法や分野は、金属立体造形（金属彫刻）あるいは金属工芸（鍛金）のうちから自らが自由に選択し、あるいはコラボレートして作品制作に臨む。	
課題研究Ⅱ	(5 中村 滝雄) 修士制作作品完成のため、テーマとアイデアの再検討や修正を行い、表現方法やフォルムを探索すると同時に、制作する高度な加工技術の修得を指導する。 制作する技法や分野は、金属立体造形（金属彫刻）あるいは金属工芸（鍛金）のうちから自らが自由に選択し、あるいはコラボレートして作品制作に臨む。	
課題研究Ⅰ	(6 松原 博) 本授業は課題研究指導である。 デザインマネジメント特論演習を通じて得た「経営とデザインマネジメントのかかわり」を基本に修論作成の予備段階としての研究を行う。 具体的には大きく変容しつつある自動車メーカーを題材とし、新時代に向けた商品戦略を打ち出すために、市場変化、技術の革新などを踏まえた企業ビジョンの再構築と商品企画開発を仮想プロジェクトとして行う。	
課題研究Ⅱ	(6 松原 博) 本授業は課題研究指導である。 デザインマネジメント特論演習、課題研究Ⅰを通じて構築した商品企画開発をベースに、具体的な販売展開戦略の完成を2年間の集大成として終了論文とする。 国内市場展開、さらには海外戦略の展開、同時に個々のマーケットにおける想定される課題とその対応策を検討、具備することによって企画の妥当性、市場への浸透、販売戦略の構造を把握する。	
課題研究Ⅰ	(7 武山 良三) 本授業は論文指導である。修士論文に向けて、その第一段階として先ず関連の研究成果に関する文献等の講読、資料収集、調査を行う。論理を展開する手法としてスタディモデルを作成し、具体的なデザイン事例をフィードバックしながら論旨を固めていく。論文では、その構成、論点、書き方などについて指導する。	

特別研究

課題研究 II	(7 武山 良三) 本授業は論文指導である。先ず関連の研究成果に関する資料収集、調査を行う。その後、実践的なプロジェクトを立案し、デザインプログラムを実施する。導入効果を関係者から調査分析し、他の事例にも対応できるようなデザインプロジェクトモデルを立案し、論文にまとめる。	
課題研究 I	(8 長山 信一) 修士論文作成のための前段階として、プロダクトデザイン製品の評価には、科学的なアプローチが不可欠である。既存の製品を様々な角度から分析・検証する。例えば、計量心理学的な測定方法・官能検査などの感性工学的なアプローチや、動作解析・人体計測などの人間工学的なアプローチなどの評価方法を研究する。	
課題研究 II	(8 長山 信一) 修士課程修了制作の課題研究指導。プロダクトデザインの基本は、問題点の把握にある。地域の地場産業に関連するテーマを設定し、デザインリサーチを実施する。問題点やその構造を把握し、解決策となるデザイン・コンセプトを立案する。造形研究および人間工学的な知識を応用した提案にまとめるデザインプロセスを学ぶ。	
課題研究 I	(9 前田 一樹) 修士論文ないし作品制作のための、第一段階として研究テーマの設定指導を行う。デザインの目的を深く理解することにより、浮かび上がる疑問点を抽出し、その解決のための方法論として、概念の転換を目的とした、知の領域の拡大に拠る視座を認識できる指導を行う。コンセプトの研究による検証を重ね、デザイン理念の形成を行う。 進め方は、共同研究チームによるテーマの抽出を行い、その方向性の元に個人テーマに沿った研究を行う。	
課題研究 II	(9 前田 一樹) 修士論文ないし作品の完成に向けて、より多角的に考察できるように研究指導の推進を図る。ビジュアルコミュニケーションデザインにおける、美的情緒を除いた伝達に関する基礎的調査・研究を行う。視覚伝達を中心として、他の感覚器官と関係する要因または、その関係性の研究や視覚伝達要素としての言語、色彩、などが担う基礎的相互作用の研究を、デザインという広義な生の生成装置を概念として、理解を深めながら研究を行う。	
課題研究 I	(10 貴志 雅樹) 本授業は修論指導である。 人間を取り巻く自然環境、社会環境に対して調査を行い、問題点を抽出し、建築設計やまちづくり、ランドスケープデザインを行うことで解決案を提案する修士設計をおこなうための前段階として位置づける。 修士設計作成のため、第1段階として研究テーマの設定、先行研究の研究、課題目的に応じた、フィールドサーベイの場所選定から方法論の指導を行い、レポートを作成させる。レポートの分析を通して、修士設計に向けて、中間論文、中間設計の内容を、作成することを目標とする。	
課題研究 II	(10 貴志 雅樹) 本授業は修論指導である。 建築を中心とした人間を取り巻く環境にたいしての修士設計指導である。 修士設計のテーマを設定するに至った問題提議、解決法の小論文を作成する。それを設計主旨として、課題研究 I で行った、中間論文、中間設計案に修正を加える。建築、街づくり等の修士設計を完成させるため、計画策定、設計主旨の作成、修士設計図作成、ダイアグラム作成、CGによるパースの作成、モデル作成を完成品として、プレゼンテーションの技術を向上させ、修士設計を完成させることを目標とする。	
課題研究 I	(11 丸谷 芳正) 修士設計（デザイン）の指導である。修士設計（デザイン）をおこなうための前段階として位置づける。修士設計（デザイン）作成のため、第1段階として研究テーマの設定、先行研究の研究、課題目的に応じた、調査対象の選定および方法論の指導を行い、レポートを作成させる。レポートの分析を通して、修士設計（デザイン）に向けて、中間論文、中間設計の内容を、作成することを目標とする。	
課題研究 II	(11 丸谷 芳正) 修士設計（デザイン）指導である。課題研究 I で行った、中間論文、中間デザイン案を基にして修正を行う。修士設計（デザイン）の完成のため、計画策定、作成指導を通して、修士設計（デザイン）の論文作成、設計図作成、CGによるパースの作成、モデル作成を完成品として、修士設計（デザイン）を完成させることを目標とする。	

課題研究 I	(12 秦 正徳) 長期耐用された木質構造住宅に関する研究を対象に、木材学会、日本建築学会、地方公設機関の研究報告書などを検索し、木質構造の、環境に対する特性、地域の生活との関係、地域大工技術の伝承、構造の特性などについて、既往の研究成果をまとめる。これらの調査研究により、木質構造にとって長期耐用されるための重要な側面を絞り込み、建造のための問題点について現地調査も含めてさらに深め、研究課題を定めるまでの研究指導を行う。	
課題研究 II	(12 秦 正徳) 課題研究 I で定めた研究課題について、具体的に、調査、実験を進めその成果を論文としてまとめるための研究指導を行う。修士論文完成のため、地域型木造軸組構造の構成要素実験を行い構造解析に必要なデータを集成し、これにより当該構造の構造評価に関する研究成果をまとめる。 次のような課題が想定される。 ① 地域型木造軸組住宅の構造設計に関する研究 ② 地域型木造軸組住宅の耐震性能に関する研究 ③ 地域型木造軸組住宅の劣化診断に関する研究 ④ 地域型木造軸組住宅の耐震補強に関する研究 ⑤ 地域型木造軸組住宅を起点とした木造住宅の構造設計に関する研究	
課題研究 I	(13 松政 貞治) 本授業は論文指導である。建築、都市、景観、町並は歴史的文化的環境の造形であるという視点で実践される営為を、歴史的文化的コンテクストの中で個人や共同体の自己同一性を保証する様々な歴史的文化的「意味の織物」の制作・解釈・構成として捉える。そのために最も適切な事例を見出し、その分析と一般化の可能性を探るための方法論を現象学、現代哲学、言語学などの基礎的研究を通して把握することを求め、その上で、独創的な視座の確立を指導する。具体的な素材としては、国内外の都市、建築、景観などのほか、枯山水、中国の庭園、茶室などを対象とし、領域としては建築論、建築史、景観論、都市デザイン、都市形成史、建築記号論、建築テキスト論、比較文化論などから選択する。	
課題研究 II	(13 松政 貞治) 本授業は論文指導である。松政の課題研究Iに示したように、都市や景観を含めた建築は何よりもまず歴史的文化的な意味の環境であり、我々に良い影響を与える建築・都市のデザインは優れた意味関係の相互参照的構造化であるということに関わる修士論文を執筆するための、より高度な研究指導を行う。その結果、建築一般を、空間及び形態の意味-歴史性の沈澱・蘇生・変形の過程として捉え、その伝承と文化との動態的構造を、類型学的及び記号論的な視点から、従来の建築史や都市史、文化史の枠組みを越えて総合的に論じられる能力と、建築と都市を分離せず、都市建築として一体的に把握し、それぞれの時代や地域にどのようにして固有な都市建築が生成するのかを理解する能力を身につけることを目標とする。 課題研究 I をもとに作成した研究課題の概要に則して、方法論と事例の研究を修正・発展させ、修士論文を執筆するための指導を段階的に進める。	
課題研究 I	(15 齊藤 晴之) 本科目は課題研究指導である。立体表現の特別研究として、課程で履修した立体表現特別演習A、立体表現特別演習Bの授業において修得した知識や技術の蓄積を踏まえて修了制作の予備段階としての研究制作を行うものである。 それぞれの独自の研究計画を策定し、研究指導を行う。研究計画、テーマに沿った具体的な制作物を提示し、より明確に研究成果を実在化していく。個々の制作における素材の利用方法、制作技法関連付けや展開法を検討し、独自の表現様式を導き出す。 * エスキース制作：各種素材、技法を利用して複数の表現法を提示する。 * 習作制作：表現の方向性を絞り素材の特性を引き出す技法を構築する。	
課題研究 II	(15 齊藤 晴之) 本授業は課題研究指導である。これまでに履修した特別研究 課題研究 I での成果としての経験や知識を踏まえて2年間の集大成として、研究テーマを構築し、研究並びに制作を行う。平面、立体造形表現としての新しい可能性を展開する上で、これまでにこなしてきた研究制作を更に発展的に捉え、類似の無い創造的作品制作・研究となるように種々の試作と検討を充分に行ない、各自のテーマに基づいたイメージを素材や技法の特徴を最大限に引き出し、具体化することを目指す。設定したテーマに沿って、授業の計画を学生と共に協議し、エスキース制作から本制作に至るまで、各自の研究内容に沿って制作研究の指導を行う。	
課題研究 I	(16 辻合 秀一) 像情報処理についての修士論文のために必要な知識や技術を身につけ、テーマを次第に絞りつつ、関連文献の講読を進めながら、問題設定を明確にする。必要に応じて実験やフィールドワークなどの調査計画を立て、実施する。研究計画を策定し、修士論文作成に向けて研究指導を行う。	

課題研究Ⅱ	(16 辻合 秀一) 像情報処理についての修士論文を完成させるために研究計画を策定し、必要な知識や技術を身につけ、テーマを次第に絞りつつ、関連文献の講読を進めながら、問題設定を明確にする。必要に応じて実験やフィールドワークなどの調査計画を立て、実施する。修士論文作成に向けて研究指導を行う。	
課題研究Ⅰ	(17 高橋 誠一) 本授業は課題研究指導である。学士課程で習得した漆工芸品制作に必要な不可欠である企画、デザイン、造形、素材、漆工技法の能力レベルアップを目的とする。学生個人の能力、状況を教員とのミーティングを通して学生自身が把握し、弱点を克服するための作品制作課題を、教員とミーティングを重ねて設定し、その目標に向かって制作・研究を重ねる事により、漆工芸品制作の能力を高める。	
課題研究Ⅱ	(17 高橋 誠一) 本授業は課題研究指導である。学士課程、修士課程での研究により身に付けた技術、知識、経験の集大成として行う。現在の漆工芸の置かれている位置を、社会情勢、市場、文献などの調査から把握し、その現状にとって有益である漆工芸品のあり方を、作品として制作し、発表する事により広く社会に提案する。	
課題研究Ⅰ	(18 渡邊 雅志) 本授業は課題研究制作である。 授業は各自が具体的なテーマを発見するところから始まる。ものや環境に対する深い観察眼から見出した事象から、新しいデザインを生み出すための実験モデルや検証を繰り返し、ブレのない適正解の精度を上げていく。最終的には創作物とともに、新しいデザインを生み出した創作プロセスをブックレットにまとめる。	
課題研究Ⅱ	(18 渡邊 雅志) 本授業は課題研究制作である。 授業は地元と連携できる可能性を探りながら、連携先とともに具体的なテーマを設定するところから始まる。様々な諸条件、既成概念、ものの本質を見極めながら、新しいデザインを生み出すための実験モデルや検証を繰り返し、ブレのない適正解の精度を上げていく。最終的には創作物とともに、新しいデザインを生み出した創作プロセスをブックレットにまとめ、連携先に対して最終プレゼンテーションを行い、学外の評価を受ける。	
課題研究Ⅰ	(19 清水 克朗) 金属加工技術のなかの鑄造技法（込型鑄造技法、蠟型鑄造技法、惣型鑄造技法、生型鑄造技法、石膏型鑄造技法、精密鑄造法、CAD・CAM）による修士作品制作のため、その第一段階として制作意図、制作計画、作品制作方法の指導を行い、美的感性及び企画力、技術力を涵養し、修士作品制作に向けて研究指導を行う。	
課題研究Ⅱ	(19 清水 克朗) 金属加工技術のなかの鑄造技法（込型鑄造技法、蠟型鑄造技法、惣型鑄造技法、生型鑄造技法、石膏型鑄造技法、精密鑄造法、CAD・CAM）による作品制作計画を策定し、修士作品制作に向けて制作指導を行う。	
課題研究Ⅰ	(20 沖 和宏) 本授業は制作または、論文指導である。実践と理論をバランスよく両立させた研究を通して、全てのデザイン領域における、コミュニケーション・デザインの手法を掘り下げることを目的とする。共通の大きなテーマを設け、広告、パッケージ、アイデンティフィケーション、プロダクト、空間など、学生個々がその時点で志向するデザイン領域を軸足にして、固有のアプローチでそのテーマを掘り下げていく。情報と人との関係の洗い出しを、むしろ広い領域に関連づけながら掘り下げ、成果を蓄積していく。それらを通して自己の専門分野の確立をめざす。基本的に個別での調査分析と指導を行うが、時期を見て個々の学生が知り得た情報を共有し、ディスカッションも行う。最終的には固有の手法・概念を結論づけ、次年度の「課題研究Ⅱ」につなげる。	
課題研究Ⅱ	(20 沖 和宏) 課題研究Ⅰの受講を前提とする修士制作、または修士論文指導である。前年の成果（課題研究Ⅰによって確認された学生固有の手法・概念）を継続して自身の研究に投影し、デザイン・プロジェクトを通して実践する。修士研究としてデザイン・プロジェクト（修士制作）、あるいは結論の明文化による記録と報告（修士論文）として具体化する。	

課題研究 I	<p>(21 矢口 忠憲)</p> <p>本授業は制作系の指導である。設定テーマに沿った基礎調査を元に、的確な方向付け（コンセプトメイキング）の為に裏付けとなる文献読解や関連事例調査、実験などを行い、「課題研究 II」に繋ぐ。</p> <p>実際に企業のデザイン現場で行われているマーケティングやマーチャングデザイン、デザインリサーチ、コンセプトメイキング、アイデア展開など、一連のデザインプロセスの前半部分に主眼を置き、自身が定めたテーマに沿って、対象となる製品の本来のあり方やユーザーニーズの本質を見極め、適切な方向性を導きだす。</p>	
課題研究 II	<p>(21 矢口 忠憲)</p> <p>本授業は制作系の指導である。「課題研究 I」で定められた方向に沿って、アイデアを展開し、適切に具体化（形体化）、後に実使用による検証も行う。</p> <p>実際に企業のデザイン現場で行われているアイデア展開やモデルメイキング、各種シミュレーション、プレゼンテーションなど、一連のデザインプロセスの後半部分に主眼を置き、自身が定めたコンセプトに基づき、適切な問題解決、提案の方向に沿って最も適した「かたち」を導きだす。</p>	
課題研究 I	<p>(22 伊東 多佳子)</p> <p>本授業は論文指導である。課題研究 I は、美学の分野で修士論文を作成する学生を対象に行う。それまでに履修した美学特論演習 I、美学特論演習 II の授業において、論理的に書かれた文章を読み、討論し、論理的に文章を書くことを学んだが、そこで身につけた能力（すなわち美学の専門的な論文を読みこなし、美学に関する考察を深めながら、自由に論じること）を土台にして、それぞれのテーマに応じた研究計画を練りながら、修士論文作成に向けて研究指導を行う。ここでの成果は修士論文の予備段階としての中間論文の作成である。</p>	
課題研究 II	<p>(22 伊東 多佳子)</p> <p>本授業は論文指導である。課題研究 II は、美学の分野で修士論文を作成する学生を対象に行う。それまでに履修した美学特論演習 I、美学特論演習 II の授業において、論理的に書かれた文章を読み、討論し、論理的に文章を書くことを学んだが、そこで身につけた能力（すなわち美学の専門的な論文を読みこなし、美学に関する考察を深めながら、自由に論じること）を土台にして、それぞれのテーマに応じた研究計画を練りながら、修士論文作成に向けて研究指導を行う。ここでは、課題研究 I で書き上げた中間論文のテーマを検討し、計画を練り直しながら、深化と発展を図り、二年間の研究の集大成となる修士論文を書き上げることになる。</p>	
課題研究 I	<p>(23 島添 貴美子)</p> <p>本授業は論文指導である。伝統芸能に関する課題について研究指導し、修士論文のテーマを発見し、絞り込むために必要な基礎知識と方法を身につける。そのために、以下の三つの内容について指導を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 テーマの発見：文献リストの作り方、文献調査の方法、文献の読み方を身につける 2 テーマの絞り込み：テーマのキーワードの設定の仕方を学び、設定したキーワードに基づいて、さらに緻密な文献調査や文献の読解方法を学ぶ 3 テーマに応じた調査方法の発見：文献調査やフィールド調査の方法、調査資料の整理や分析方法を学ぶ 	
課題研究 II	<p>(23 島添 貴美子)</p> <p>本授業は論文指導である。伝統芸能に関する課題について研究指導し、修士論文の完成に向けて、課題研究 I で設定したテーマを再検討し、計画を練り直した上で、補足調査と調査資料の分析方法を行う。そして、執筆にあたって、論文の構成を再検討し、構成に基づいた資料整理を行い、論理が明白で、わかりやすい文章の書き方を学ぶことを目標とする。以下の六つの内容について指導を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 テーマの見直し：課題研究 I で収集し分析した資料に基づき、テーマを見直すとともに、執筆までの計画を確認する 2 補足調査：見直したテーマに基づいて不足している資料を点検し、資料収集と調査を行う 3 論文の構成：目次と各章で執筆する内容の概要を作成する 4 資料整理：目次に基づいた資料整理を行う 5 論理が明白で、わかりやすい文章の書き方を学ぶ 6 執筆したものを推敲し、完成させる 	

特別研究	課題研究 I	(24 大熊 敏之) 本授業は修士論文指導である。「日本伝統造形史」の研究分野における、日本画、書、置物、木彫、人形、伝統工芸、盆栽と鑑賞石、細工、つくりもの等についての修士論文作成にむけて、美術史学や文化資源論の見地から研究指導を行う。具体的なテーマ設定に基づいての調査・研究の実践指導を旨として、歴史と現状分析、未来に向けての芸術文化資源としての展望をテーマとした論文指導を行う。修論完成の第一段階である1年次として、まずは、研究計画を策定し、修士論文作成に向けての初歩的な調査・研究方法の指導を行うことを主眼とする。ついで先行研究に関する調査や文献調査、事例調査を行い、事例の分析と検討を経たうえで、修士論文に関する中間報告会を実施し、2年次の課題研究 II につなげる。	
	課題研究 II	(24 大熊 敏之) 本授業は修士論文指導である。修士論文の完成に向けて、1年次に引き続き、「日本伝統造形史」の研究分野における、日本画、書、置物、木彫、人形、伝統工芸、盆栽と鑑賞石、細工、つくりもの等についての修士論文作成にむけて、美術史学や文化資源論の見地から研究指導を行う。課題研究 I の成果に基づいて、さらに文献及び事例の調査や史資料及び先行文献の読解と批判的検証を進め、その上で、修士論文に関する検討を繰り返しながら、最終的に修士論文を完成させる。	
	課題研究 I	(25 高島 圭史) 本授業は課題研究指導である。修士課程の制作研究を行う。学生各自が制作テーマを深め、取材から小下図制作、大下図制作から本画制作へと段階的に作業を進め、計画的かつ構築的に制作・研究を行う。中間段階において、検討会や教員による助言や講評を適宜行いながら、制作研究の充実を図る。 ※作品サイズは50号程度、前期1点、後期1点の制作をもって単位認定対象作品とする。	
	課題研究 II	(25 高島 圭史) 本授業は課題研究指導である。修士課程の制作研究の総まとめとして大作制作を行う。学生各自が制作テーマを深め、取材から小下図制作、大下図制作から本画制作へと段階的に作業を進め、計画的かつ構築的に制作・研究を行う。中間段階において、検討会や教員による助言や講評を適宜行いながら、修了制作の内容充実を図る。 ※作品サイズは130～150号、1点の制作をもって単位認定対象作品とする。	
	課題研究 I	(27 米川 寛) Webコンテンツの開発・利用に関する研究テーマを設定し、修士論文の作成を視野に入れた研究指導を行う。研究計画を作成し、文献調査や動向調査によって先行研究の問題点や課題を把握した後、その解決に向けた具体的な調査研究を実施する。その成果をレポートしてまとめる他、前期と後期各々に発表会を実施する。また関連学会の研究会へ参加し発表を行う。	
	課題研究 II	(27 米川 寛) 修士論文の完成に向けて研究指導を行う。課題研究 I の成果とその問題点を把握し、研究計画を再考する。その後具体的な調査研究を継続実施し、その成果を修士論文としてまとめる。前期と後期各々に発表会を実施する他、関連学会の研究会へ参加し発表を行う。	